

初期箱式石棺の二型式

—薄壁式と厚壁式—

徳島大学埋蔵文化財調査室 端野晋平

要旨

本稿の目的は、日本列島西部の縄文時代晩期後葉～弥生時代前期に属する初期箱式石棺の型式分類を行い、その時空間の様相を検討した結果をふまえ、設定された型式の祖型、受容をめぐる問題を論じることである。先行研究では、各研究者によって異なる基準を用いた分類案が提示されていたが、その分類過程や、分類単位としての妥当性は十分に示されていない。そこで筆者は、型式設定にあたり、属性分析を用いることで、分類過程を明示するとともに、安定した分類単位の析出に努めた。結果として、「薄壁式」と「厚壁式」の二大別型式が設定され、前者はさらにⅠ～Ⅲ式に細別された。これらの型式を成立させた背景についても、型式と被葬者に関する情報との関係のみて検討した。つづいて、設定された型式の存続時間幅を、地域・遺跡ごとに検討した。最後に、以上の分析結果をふまえ、各型式の祖型と、各地域での受容に関する問題について論じた。

キーワード 初期箱式石棺、型式、分類単位、属性分析、祖型

はじめに

日本列島の九州北部において、縄文時代の終末期に出現する埋葬施設の一つとして、箱式石棺がある。この系譜は在来の縄文文化には求め得ず、水稻農耕とともに朝鮮半島から伝来したものとみて間違いない。列島に定着した石棺は、弥生時代の墓制のなかでやがて一定の割合を占めるようになり、さらに古墳の埋葬施設として引き継がれていく。九州北部・中四国に分布する初期箱式石棺¹⁾に関しては、これまでも様々な論点から多くの議論がなされてきた。ところが、分析の基礎となる「型式」を規定する属性の選択理由、あるいは設定された「型式」の分類単位としての妥当性は明示されていない。また、祖型や受容の問題についても、近年の列島・半島での資料蓄積をふまえれば、さらに踏み込んだ議論が可能である。そこで本稿では、初期箱式石棺を対象に、属性分析に用いて、新たに型式を設定し、その時空間の様相を検討することによって、これらの問題について議論する。

I 問題の所在

弥生時代の石棺研究は、鏡山猛が古墳時代の石棺とは区別して「原始箱式石棺」と呼ぶことから開始された（鏡山1941, 1942）。以降、今日まで行われた議論の内容は、①型式分類、②埋葬姿勢（葬法）、③系譜、④伝播ルート、⑤方位、⑥他の埋葬施設との関係、⑦その背後にある社会など、極めて多岐にわたる。ここでは、本稿での分析項目となり、かつ相互に緊密に関係する①・②を中心に学史を整理し、そこに内在する問題点を明らかにしたい。なお、③～⑦については、稿を改めて論じることとする。

鏡山の研究以降、石棺の構造・形態について初めて本格的に論じたのは森貞次郎である。森は列島の初期支石墓の系譜を朝鮮半島に求めつつ、その下部構造である「方形に近い粗製箱式石棺」の背後に、縄文文化の伝統的な屈葬習俗の残存を読み取った（森1969）。

1970年代に入ると、長崎県域において、石棺の調査例が徐々に増加したことを背景に、石棺の法量分析や分類が試みられるようになった。化屋大島遺跡の調査を担当した井上和夫は、縄文晩期から古墳時代にかけての石棺の変遷を示したうえで、時期が下るにつれ、棺の長さが長くなり、埋葬姿勢が屈葬→屈肢葬→伸展葬の順序で変化したとみた（井上1974）。宮の本遺跡の調査を担当した久村貞夫は、棺の平面形（埋葬姿勢）、棺材の組み方によってA～Dの四つに分類した（久村1980）。原山第3支石墓群の調査を担当した高野晋司は、棺の法量によって他の遺跡例との比較を試み、また棺材の組み方によってI・II型の二つに分類した（高野1981）。大野台遺跡の調査を担当した正林護は、棺材の組み方によってI～IV類の四つに分類し、遺跡・地点ごとの棺の法量差が時期差を示す可能性を唱えた（正林1983）。

1980年代後半になると、発掘調査により蓄積された資料をもとに、地理的により広い範囲を対象として、石棺（墓）の研究が進められるようになった。藤田等は、弥生前期の石棺（墓）を、棺内法の長さ・幅・深さにより「北部九州・山口型」と「西北九州型」の二つに分類し、それぞれの祖型を縄文晩期～弥生初期の支石墓とみて、さらにその起源を大陸に求めた（藤田1987）。田崎博之は、列島西部の縄文晩期～弥生時代の石棺を構築法により、A～E型の五つに大別し、さらに棺内法の長さとの比率により、それらを細別した。そのうえで、各地域における各「型」の出現と展開を論じた（田崎1989）。

1990年代は石棺研究自体が停滞したものの、2000年代に入ると、埋蔵文化財研究集会で「墓制からみた弥生文化の成立」がテーマとされたのを一つの契機として、再び研究に火がついた（埋文研2000）。大庭孝夫は、長崎県域の縄文晩期後葉～弥生前期の石棺（墓）を、墓壇床面の掘り込みの有無・位置にもとづき、型式分類した。そして、長崎県域の北部と南部との間で、型式の分布差を認め、それを時期差に読み換え、北部から南部への伝播を主張した（大庭2003）。棺の法量と埋葬姿勢との関係を検討した谷直子は、主として石棺を採用する長崎県域では、縄文時代以来の屈葬伝統が弥生前期末葉まで続くことを示した（谷2003）。寺田正剛は、壱岐・対馬を除く長崎県域の縄文晩期～弥生時代の石棺を、棺材の組み方、長さ、枚数に

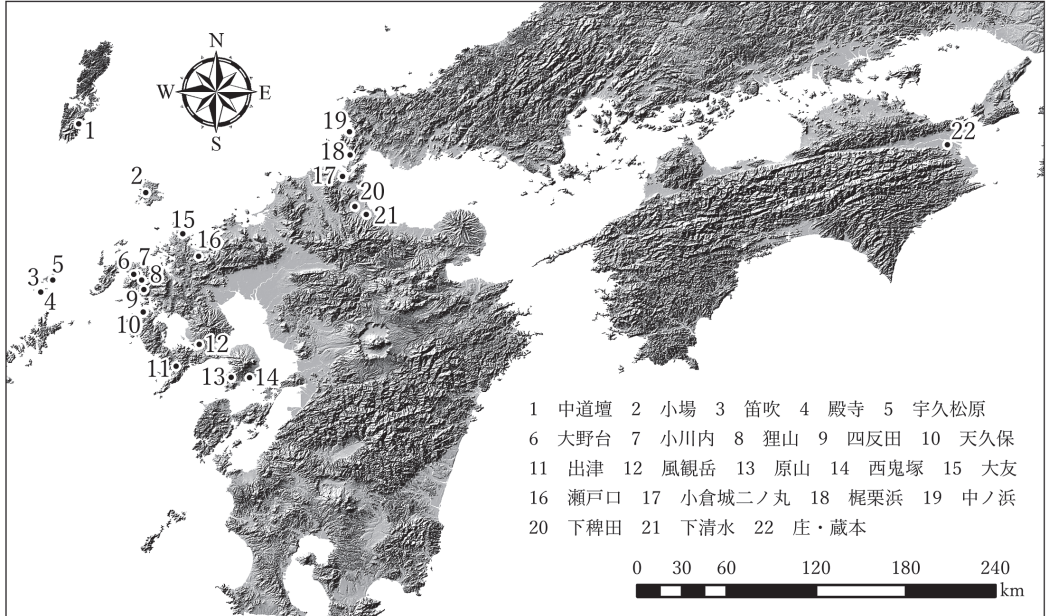


図1 分析に用いた遺跡の位置

より型式分類し、その変遷を示した。また、時期が下るにつれ、棺長が長くなる現象の背景に伸展葬化の進行を想定した(寺田2005)。

以上、①・②の論点を中心に、弥生時代の石棺研究を概観した。まず、②については、初期は縄文文化の屈葬伝統が残存するものの、時間が下るにつれ、徐々に伸展葬化するという理解でおおむね一致している。いっぽう、①については、各研究者が異なる基準を用いた分類案を提示し、結果として様々な見解が併存しているのが現状である²⁾。ところが、分類基準に用いた属性がいかなる理由で有効なものとして選択されたのか、また、結果として提示された類型あるいは「型式」が分類単位として妥当か否かは明らかにされていない。

そこで本稿では、初期箱式石棺を属性分析によって総合的に検討することで、分類に有効な属性を見出すとともに、安定した分類単位を析出し、型式を設定する。つづいて、型式を成立させた背景と、各地域・遺跡における型式の存続時間幅を検討する。最後に、以上の分析結果にもとづき、型式の祖型と受容をめぐる問題について議論する。

II 資料と方法

資料は、九州・中四国地方の22遺跡で確認された縄文晩期後葉～弥生中期初頭に属する石棺111例である(図1)。資料の収集にあたってまず問題となったのは、何をもって「石棺」とするかである。本稿では、石棺を「石材からなる自立した多辺の壁を、上から石材により閉塞し、内部に埋葬空間を作り出した構造物」と定義し、これを満たす資料を収集した³⁾。結果として、分析対象となった遺跡とその文献は次の通りである。長崎県対馬市中道壇(長崎県教委

1988b), 長崎県壱岐市小場(宮本2009), 長崎県小値賀町殿寺(正林1980), 同笛吹(小値賀町教委1997), 長崎県佐々町狸山(森1969), 長崎県佐世保市宇久松原(鹿児島国際大2008), 長崎県佐世保市四反田(佐世保市教委1994), 同小川内(坂田1978), 長崎県鹿町町大野台(小田1975, 鹿町町教委1983), 長崎県西海市天久保(九州大考古1997), 長崎県長崎市出津(外海町教委1982, 1983), 長崎県南島原市西鬼塚(有家町教委1997), 同原山(北有馬町教委1981), 長崎県諫早市風観岳(諫早市教委2006), 佐賀県呼子町大友(呼子町教委1981), 佐賀県唐津市瀬戸口(渡辺1982), 山口県下関市梶栗浜(金関1965, 2000), 同中ノ浜(潮見1984, 豊浦町教育委員会1985, 九州大解剖1988, 國分ほか1988), 福岡県北九州市小倉城二ノ丸(北九州市教委2012), 福岡県行橋市下稗田(下稗田遺跡調査指導委1985), 福岡県築上町下清水(築城町教委1984), 徳島県徳島市庄・蔵本(徳島大1998, 2018)。

分析は, おおよその所属時期を確定し得た例だけを対象とした⁴⁾。所属時期の決定は, 棺内から出土した土器などの遺物の時期によったが, 棺内出土遺物がない例についても, 周辺から出土した遺物や他の遺構との切り合い関係などから, 判断したことがある。残存状態が悪く, 棺材1枚しか残存していなかった場合でも, 後述の計測が可能であれば, 資料に含めた。なお, 上記の遺跡例以外にも, 長崎県新上五島町滝河原遺跡(桑山1964, 若松町教委1980), 同浜郷遺跡(小田1970), 福岡県行橋市長井遺跡(定村・小田1965, 行橋市教委2019)で調査例があるが, 詳細が不明なため, 資料に含めなかった。さらに, 遺存人骨により小児棺と判明した例や, 遺跡内あるいは一定の時空間的範囲で, 棺の法量により小児棺と認識し得た例についても, 資料から除外した。

型式の設定にあたっては, まず対象となる石棺を構成する属性の計測位置を設定し, それを計測することから始めた。計測にあたっては, 図の縮尺を20分の1に統一し, 三角スケールの200分の1縮尺目盛りを用いた。遺跡で確認される石棺は, 後世の破壊により棺材が消失したり, 移動したりして本来の形態をとどめていないことが多い。棺材が残存している場合でも, 本来の位置から大きく傾き, 有意な計測値が得られない例がある。現状でそれを補正する手段を知らないため, 本稿では傾向を把握するにあたって問題がない例(傾きはあってもわずかにとどまる)のみを計測した。ただ, 棺材の倒れ込みが著しく, 図上で計測が困難な例でも, 文献に復元値が記載されていれば, それを使用した場合(天久保遺跡2次調査2号支石墓)がある。この作業に合わせて, 非計測的属性の変異を抽出した。

つづいて, 対象とする資料において, 個々の計測的属性の変異, 計測的・非計測的属性間の関連状況を検討した。この作業を通じて, 属性のパターン間に不連続を見出し, 安定した分類単位を析出した。ここでの分類単位とは, 生物分類(高木1978)でいうところの分類群(taxon)に等しい。析出された分類単位を分類階級へと位置づけるまでが分類作業となるが, ここで得られた分類単位は, 「箱式石棺」という形式を細分した型式ということになろう。以上のような考え方, 方法にもとづいた物質文化の分類は, これまで青銅器や土器などの研究(岩永1980, 田中1982ほか)で実践され, 堅実な成果をあげている。

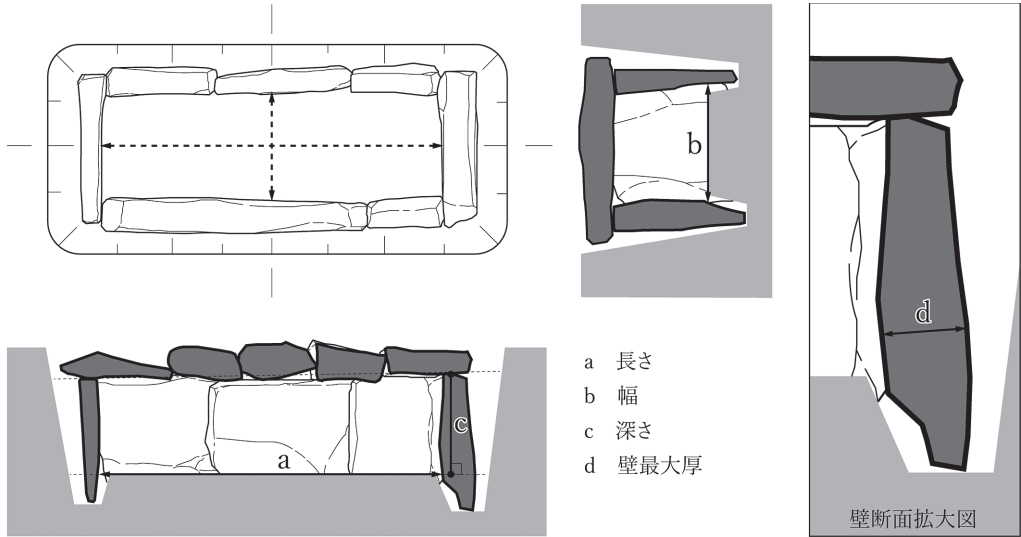


図2 石棺の計測位置

さらに、型式と被葬者の年齢・性別・数との関係性を調べることによって、型式を成立させた背景についても検討した。被葬者に関する情報は、棺内に遺存した人骨の報告によった。分析にあたっては、煩雑さを避けるために、被葬者の年齢区分は、幼児・小児をまとめて「小児」、成年・壮年・熟年をまとめて「成人」とした。

最後に、各地域・遺跡での各型式の数量・存続時間幅を一表に整理することによって、型式の出現・消滅、型式変化、定着度を検討した。地域区分は、「対馬」「壱岐」「五島列島」「長崎北部」「長崎南部」「唐津」「響灘沿岸」「周防灘沿岸」「徳島」の九つを用いた。九州北部例の所属時期については、端野（2016）の土器編年に依拠し、決定した。時期区分は、縄文晩期後葉（山ノ寺・夜白Ⅰ式期）、縄文晩期末葉（夜白Ⅱ式期）、弥生前期前葉（板付Ⅰ式期）、弥生前期中葉（板付Ⅱa式期）、弥生前期後葉（板付Ⅱb式期）、弥生前期末葉（板付Ⅱc式期）となる。響灘・周防灘沿岸例は伊東照雄（1981）、田畑直彦（2000）、徳島例は中村豊（2000, 2002）の各土器編年に依拠して決定した。これらの編年と九州北部編年の併行関係は、筆者が調整し、時期名称は九州北部編年のものに準じた。

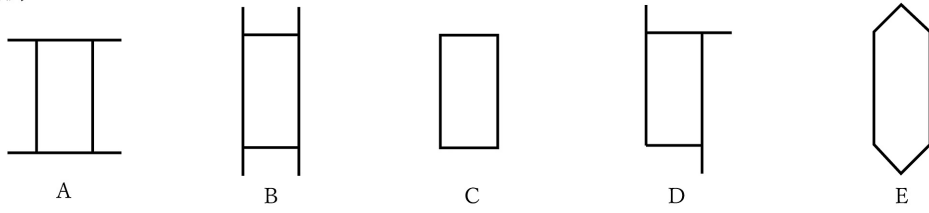
Ⅲ 分析結果

A 型式分類

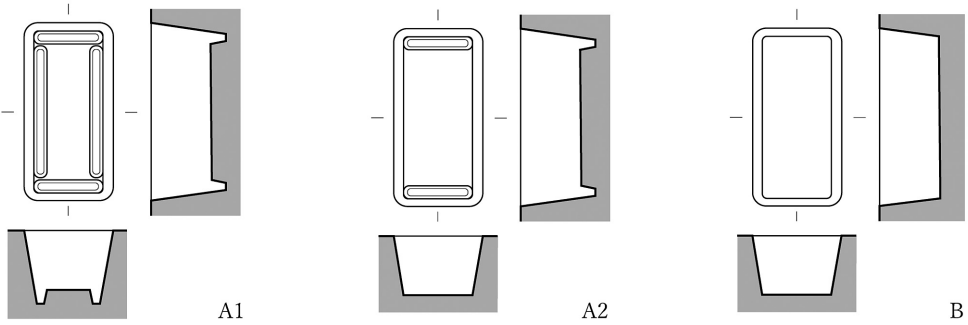
(1) 分析に用いた属性

まず、型式を設定するにあたって用いた計測的属性と非計測的属性を明らかにしたい。計測的属性は、従来より扱われてきた棺内法の長さ・幅・深さに加え、新たに壁の厚さという属性を取り上げた。当該資料を概観すると、壁の厚さに変異があることにすぐ気づく。各属性の計測位置は図2の通りである。長さ・深さは長軸断面図、幅は短軸断面図から計測した。長さ・

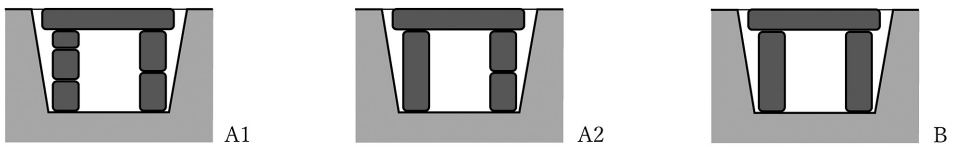
〔平面形〕



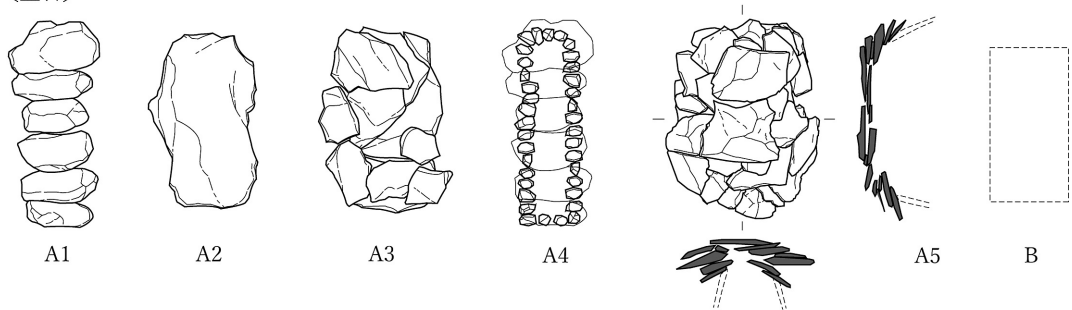
〔床面の掘り込み〕



〔壁の構築法〕



〔蓋石〕



〔床石〕

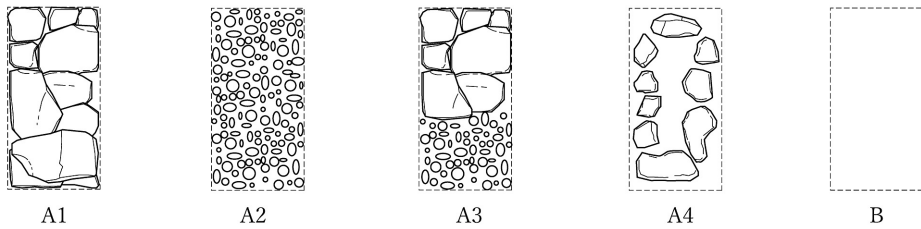


図3 非計測的属性の変異

表1 非計測的属性一覧表

<p>平面形 A：両小口壁が両側壁より突出するもの。 B：両側壁が両小口壁より突出するもの。 C：小口壁・側壁ともに突出せず、箱形をなすもの。 D：A・B・Cが混在するもの。 E：五～六角形をなすもの。</p> <p>床面の掘り込み A1：小口壁・側壁下部に掘り込みを有するもの。 A2：小口壁下部に掘り込みを有するもの。 B：なし。</p> <p>壁の構築法 A1：側壁の全てが2段以上の積石で構築されたもの。 A2：壁の一部が2段以上の積石で構築されたもの。 B：壁の全てが1段の石で構築されたもの。</p>	<p>蓋石 A1：数枚の板石を横架けして蓋石とするもの。 A2：1枚の板石を用いて蓋石とするもの。 A3：数枚の板石を不規則に重ねて蓋石とするもの。 A4：壁の上部に、転石や割石を1～2段程度積み上げ、蓋石をかけるもの。 A5：壁の上部から板石を持ち送り状に重ねてせり立たせ、アーチ状の蓋石をなすもの。 B：なし（支石墓の上石が蓋石を兼ねる）。</p> <p>床石 A1：1～数枚の板石からなる床石を有するもの。 A2：床面に礫を敷き詰めたもの。 A3：板石と礫からなる床石を有するもの。 A4：床面に間隔をあけて塊石・板石を配したもの。 B：なし。</p>
--	--

幅は床面線上の壁間の距離、深さは両小口壁の上端を結んだ線（小口線）を引き、床面線から小口線へと伸ばした垂線の長さが最大になる交点間の距離を求めた。長さ・幅は壁の基部が原位置から大きく移動している場合は、床面の掘り込み間の距離を計測した。文献に断面図が掲載されていない場合は、平面図から長さ・幅を計測した。また小口壁が消失し、長軸断面図から深さを求めることができない場合は、短軸断面図で床面線と両側壁の上端を結んだ線との間の距離からそれを求めた。壁の厚さは長軸・短軸断面図より、小口壁・側壁それぞれの最大厚を計測し、そのうち、最大値を示す壁の値を「壁最大厚」として分析に用いた。墓壙が完掘されず、壁断面が一部しか図化されていない場合、最大厚がどこか判断できないため、計測しなかった。

非計測的属性は、平面形、床面の掘り込み、壁の構築法、蓋石、床石の五つを用いた。各属性の変異は図3・表1の通りである。

(2) 型式の設定

ここでは、個々の計測的属性の変異と、計測的・非計測的属性間の相関状況とを検討することによって、型式を設定する。まず個々の計測的属性の変異を、ヒストグラムにより検討しよう。図4-aは長さのヒストグラムである。正規分布を示さず、60～70cm区間、90～100cm区間に大きなピークを、150～160cm区間に小さなピークを見出せる。図4-b・cは幅・長さそれぞれのヒストグラムである。双方ともに40～50cm区間にピークがあり、正規分布を示す。図4-dは壁最大厚のヒストグラムである。正規分布を示さず、8～10cm区間と16～18cm区間に二つのピークを見出せる。

次に、大きくみて大小二つのピークを見出せ、かつ先行研究でも分類基準とされた長さ、他の計測的属性との相関と不連続の有無を検討しよう。図5-aは長さとの関係を示した散

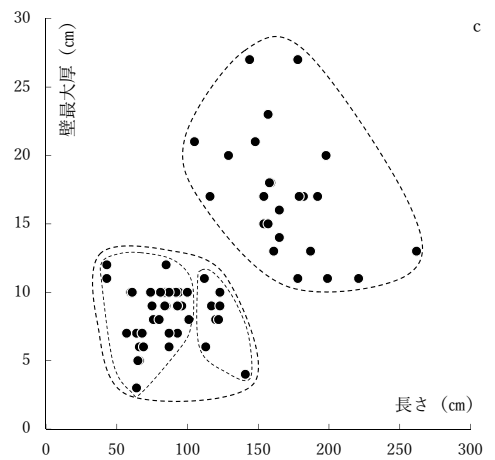
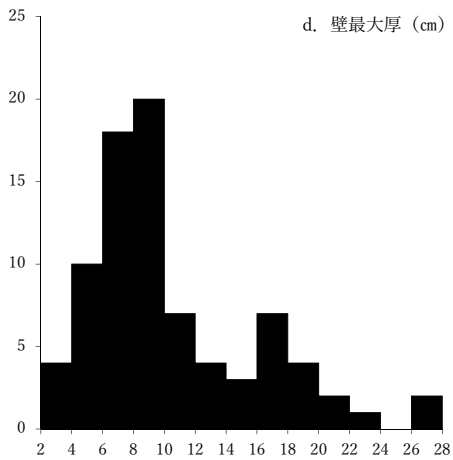
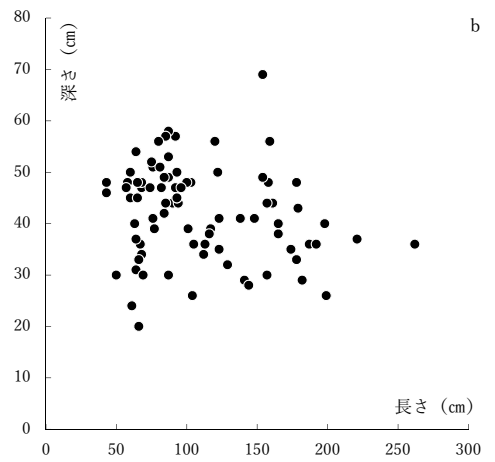
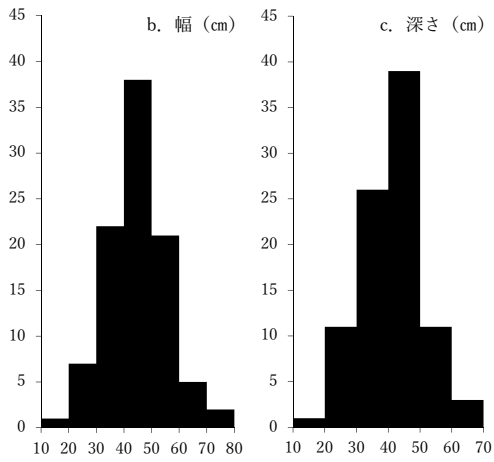
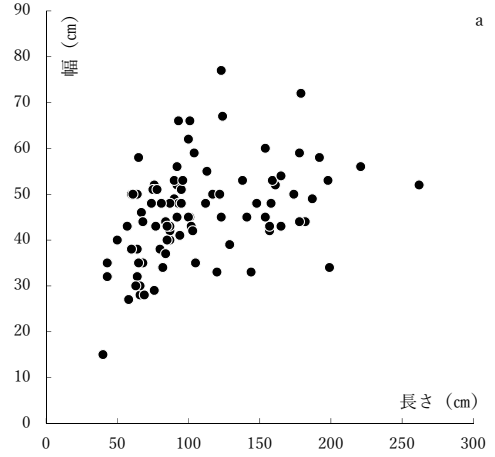
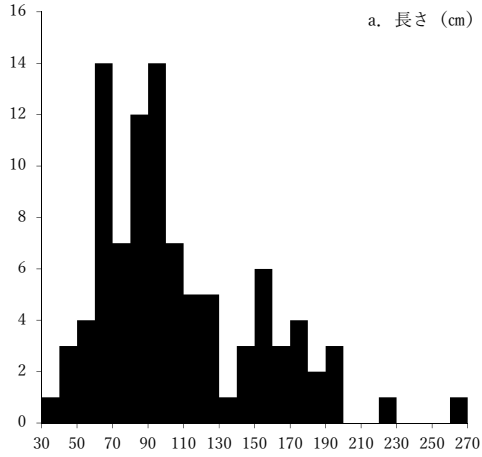


図4 計測的属性のヒストグラム

図5 計測的属性間の相関状況

布図である。分布に右上がりの傾向が看取され、正の相関が認められる。かつ分布の粗密により、長さ130cm前後で二つの群に分けることができる。これは先にヒストグラムで認められた分布傾向に対応するものである。図5-bは長さ と 深さ の関係を示した散布図である。両属性の間で相関は認め

表2 単相関係数による相関分析の結果

	長さ	幅	深さ	壁最大厚
長さ	1.000	0.393*	-0.185	0.592*
幅	0.393*	1.000	0.091	0.042
深さ	-0.185	0.091	1.000	-0.014
壁最大厚	0.592*	0.042	-0.014	1.000

有意差水準 * 1%

められないが、長さ と 幅 の関係の場合と同様に、二つの群に区分できる。長さ と 幅 の関係、あるいは長さ と 深さ の関係で見出せた二群は、藤田 (1987) でいえば、長さの大きい方は「北部九州・山口型」、小さい方は「西北九州型」にほぼ該当するものと考えられる。図5-cは長さ と 壁最大厚 との関係を示した散布図である。分布に右上がりの傾向が看取され、正の相関が認められる。かつ分布の粗密により二つの群に分けることができる。そして、値の小さい群については、長さに注目すると、さらに二群に細分できる。

このように、長さ と 幅、長さ と 壁最大厚 の二つの関係で、正の相関が認められたが、いずれの関係において、相関がより強いのか問題となろう。そこで、他の属性間 の関係をも含め、単相関係数による相関分析を行った。すると、表2のような結果が得られた。これによれば、長さ と 幅、長さ と 壁最大厚 の間で正の相関が認められ (有意差水準 1%)、長さ と 幅 の間よりも、長さ と 壁最大厚 の間で相関係数の値が高く、相関がより強いことがわかる。

以上、長さ と 他の三属性 の関係を検討したが、長さ と 壁最大厚 の関係において、最も有意な結果が得られた。さらに、ここで認められた二つの群 (以下、値の小さい群を α 群、値の大きい群を β 群と呼ぶ) の分類単位としての妥当性を確認するため、各非計測的属性 と の関係も検討する。図6-aは α ・ β 群 と 平面形 の関係を示した散布図である。 α 群ではC類が多くを占め、D類も一定量含まれる。A・B・E類が存在する。いっぽう、 β 群ではC類が多くを占めるが、D類は僅少で、A・E類は存在しない点で α 群とは異なる。図6-bは α ・ β 群 と 床面の掘り込み の関係を示した散布図である。 α 群ではA1類とともにB類も多く含まれる。A2類が存在する。いっぽう、 β 群ではA1類が多くを占め、A2類も存在するが、B類は僅少である点で α 群とは異なる。図6-cは α ・ β 群 と 壁の構築法 と の関係を示した散布図である。 α 群ではほとんどがB類で占められている。A1類は存在せず、A2類は極めて少ない。いっぽう、 β 群ではA1類が存在し、A2類が多く含まれている点で α 群とは異なる。図6-dは α ・ β 群 と 蓋石 の関係を示した散布図である。 α 群ではA2類が一定量、A3類が多く含まれ、A5・B類が存在する。A1・A4類は存在しない。いっぽう、 β 群ではA1類が多くを占め、A4類も存在し、A2・A3・B類が存在しない点で α 群とは異なる。図6-eは α ・ β 群 と 床石 の関係を示した散布図である。 α 群ではA1類が多くを占め、B類も一定量含まれる。A4類が存在する。A2・A3類は存在しない。いっぽう、 β 群ではB類が多くを占めるが、A1類は僅少である。A2・A3類が存在する点で α 群とは異なる。このように、各属性にお

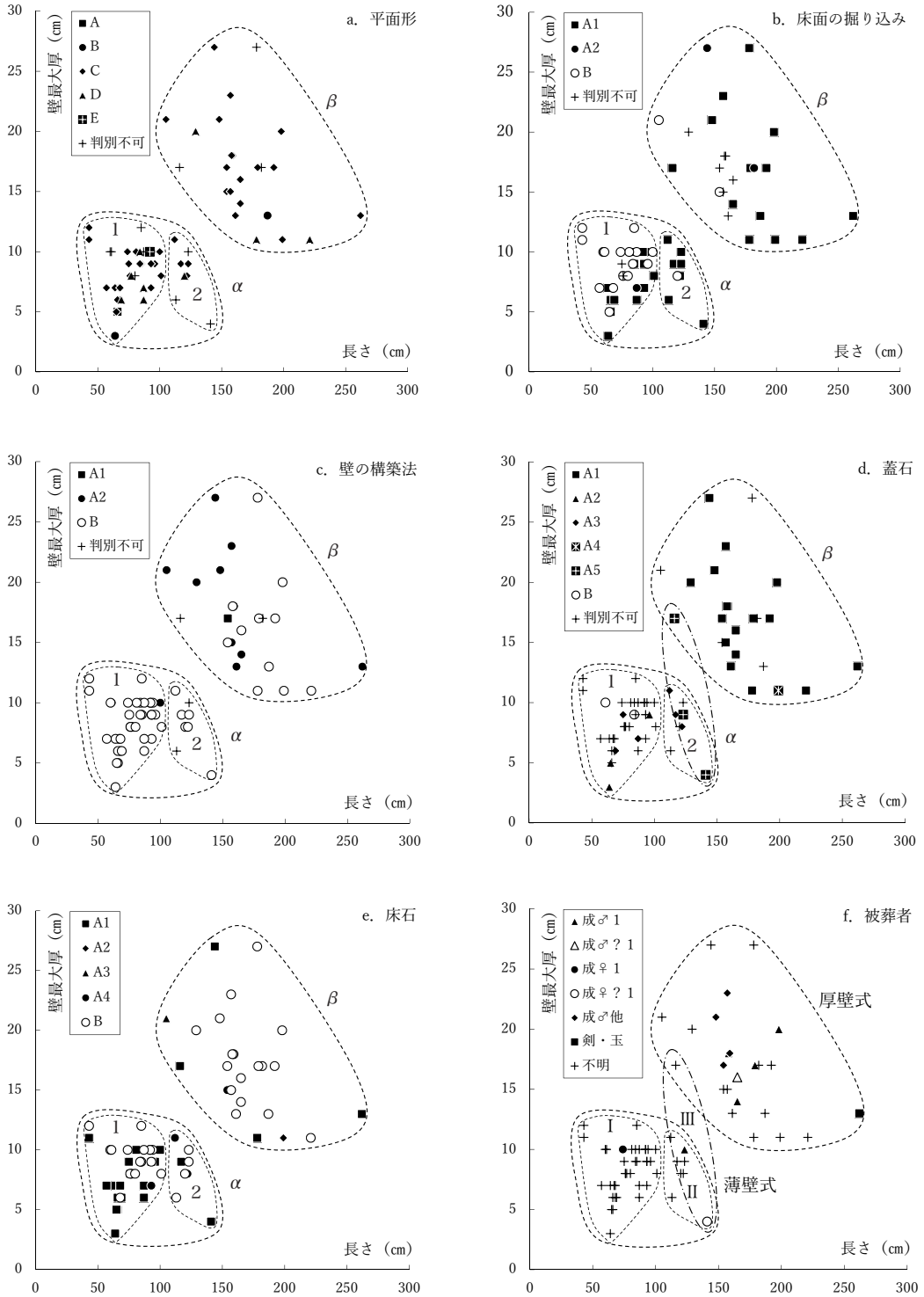


図6 長さ×壁最大厚と非計測的属性の相関状況

いて、 α 群と β 群の間で、相関の強い、あるいは相関のある類型が異なる。これは、長さと壁最大厚の関係で見出せた不連続の妥当性を示している。

以上のように、 α ・ β 群の分類単位としての妥当性が確認された。そこで本稿では、長さと壁最大厚の関係にもとづいて型式を設定し、 α 群を「薄壁式」、 β 群を「厚壁式」と呼称する。壁の厚さに因んだ名称を付けたのは、この属性が型式判別の基準となるだけでなく、それぞれの型式の祖型を考えるにあたって、重要な意味をもつからである。なお、壁最大厚の値が得られなかった例については、長さが142cm未満の例を薄壁式、142cm以上の例を厚壁式とみなした。また、長さの値が得られなかった例については、壁最大厚が13cm未満の例を薄壁式、13cm以上の例を厚壁式とみなした。これは、図5-c上で薄壁式に属する個体群の長さ・壁最大厚の上限値にもとづいている。

さて、以上の二型式は細分することはできないであろうか。その余地のあるのは、薄壁式である。先述のように、薄壁式に該当する α 群はさらに細分が可能であり、長さ112cm未満の α 1群と長さ112cm以上の α 2群に分けられる(図6-a~e)。各群と非計測的属性の相関状況をみると、とくに床面の掘り込み、蓋石との間に、有意な相関が認められる。すなわち、床面の掘り込みにおいては、 α 1群は多くのB類を含むのに対し、 α 2群はほとんどがA1類であり、B類は1例にとどまっている。蓋石においては、 α 1群はA2類、A3類、B類を含むのに対し、 α 2群はA3類を含む点で α 1群に共通するものの、A2類、B類は含まず、A5類を含む点で異なっている。こうした事実にもとづき、薄壁式を長さ112cm未満の α 1群=I式と、長さ112cm以上の α 2群=II式に細分する。また、蓋石A5類(板石を持ち送り状に重ねてアーチ状の蓋石をなすもの)は、 α 2群から β 群の左下部にかけて、二つの群を横断して分布(一点破線内)していることがわかる。このA5類は型式学的に、薄壁式だけに備わるA3類(数枚の板石を不規則に重ねて蓋石とするもの)からの変化を想定できる。この変化は、長さ・壁最大厚の増大とも連動したものであることが図から読み取れる。こうしたことから、蓋石A5類を備えた例を、分布範囲が重なる薄壁II式から分化したものとみなして、薄壁III式と呼ぶこととする。結果として薄壁II式は、 α 2群に属する例で、蓋石A5類を備えた例を除外した残りが該当することとなる。なお、薄壁III式は五島列島を中心に分布する「板石積石棺墓」(小田1984)に相当する。以上の型式の例を示すと、図7・8の通りである。

ところで、本稿で設定された型式の「大雑把さ」について不満を感じる読者がいるかもしれない。実際、これまでの研究の中には、本稿よりも数多くの「型式」を提示したものもある。しかし、次節で検討するように、本稿の目的の一つは、石棺製作者の脳裏にある理念型に迫ることである。そのために、以上のような手続きを経て、型式を設定したわけであり、これ以上の細分は行わない。先行研究が「型式」分類の基準とした棺材の組み方や床面の掘り込みにみられる多様性は、一型式のなかの、一属性の変異ととらえられる。

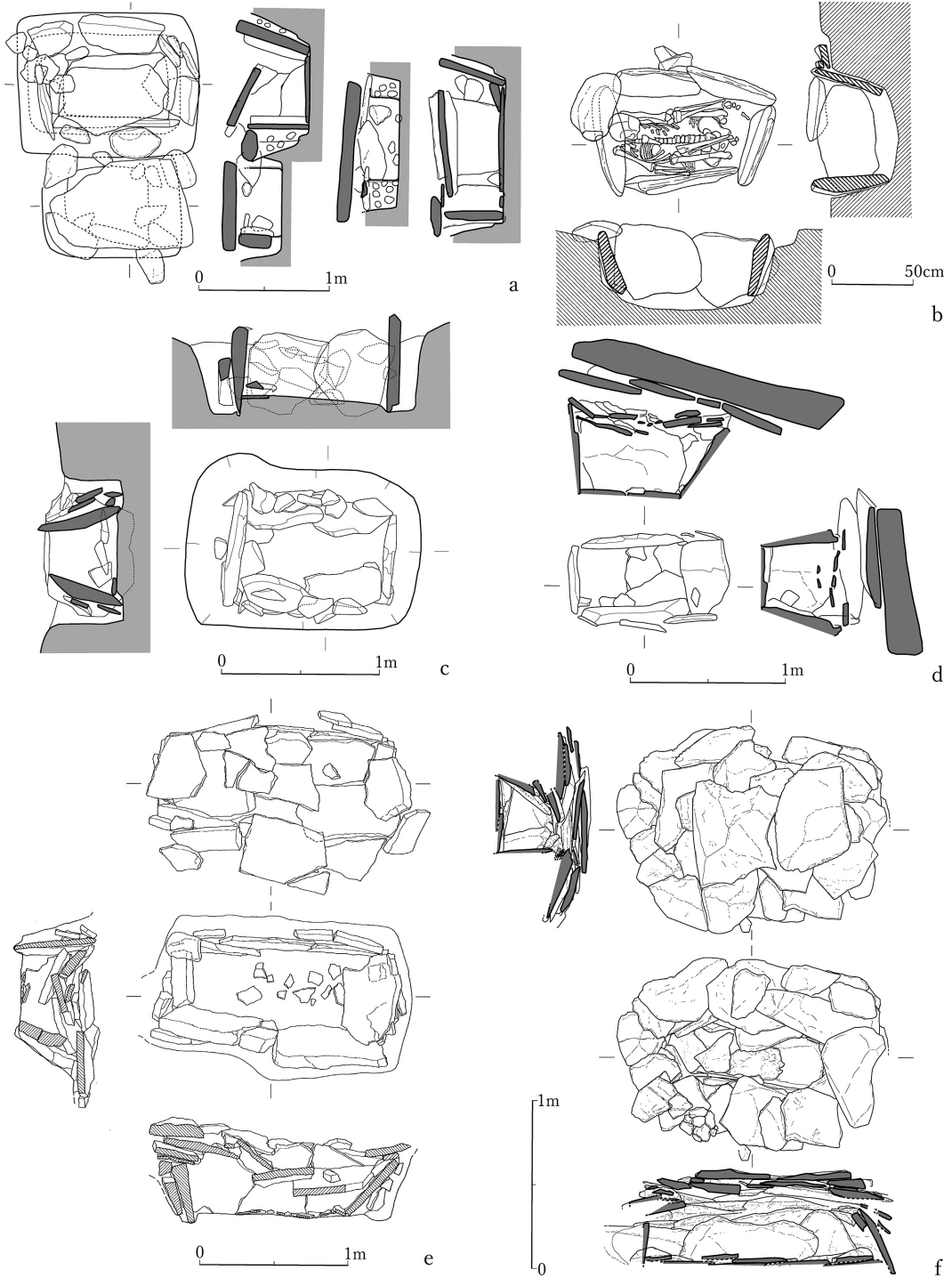


図7 薄壁式石棺の例

a 小川内6・9号支石墓(I式) b 出津1号石棺(I式) c 原山20号支石墓(I式) d 風観岳28号支石墓(I式)
 e 中道壇2号石棺(II式) f 宇久松原2004年度 SK025(III式) (各文献より引用改変)

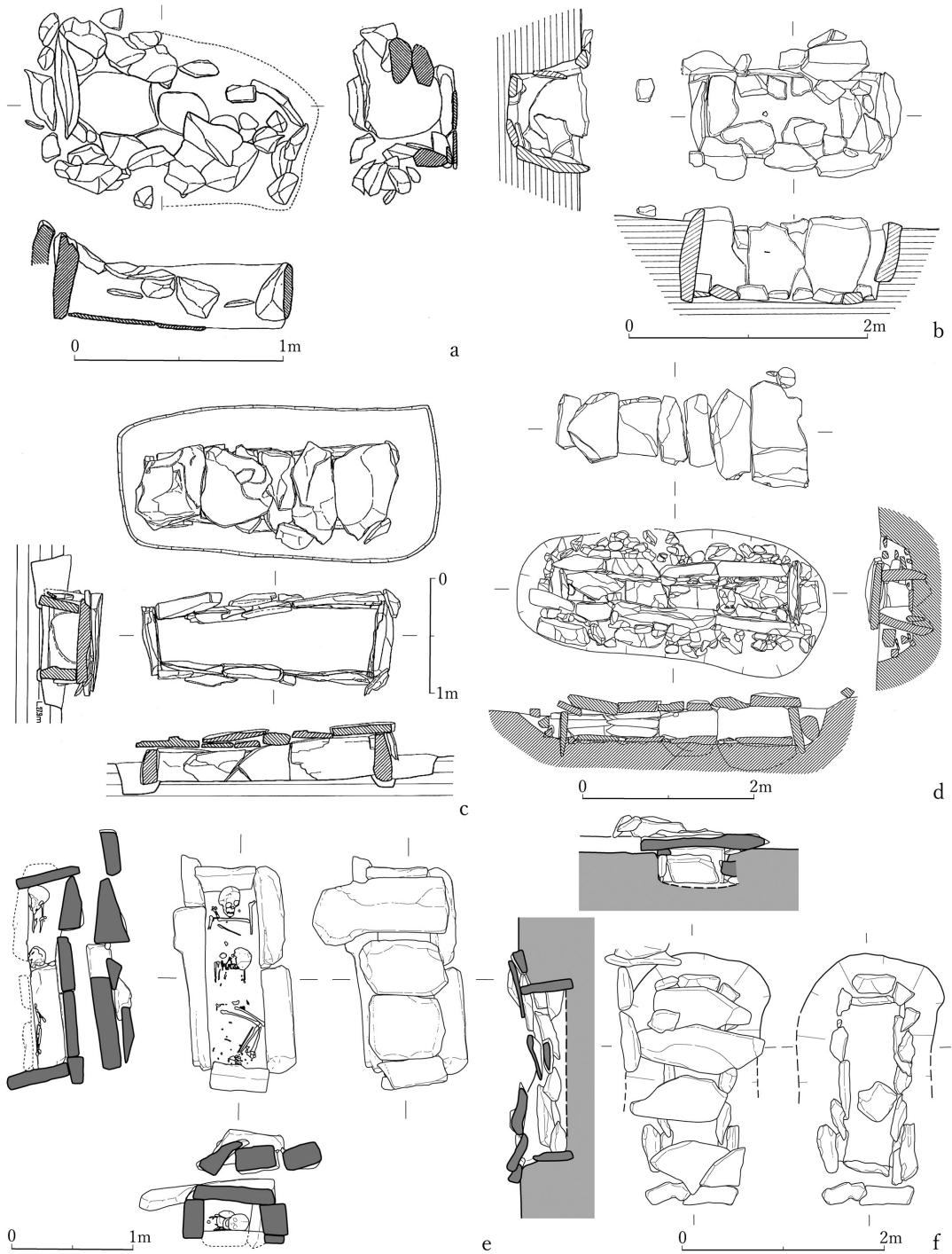


図8 厚壁式石棺の例

a 大野台C地点8号石棺 b 瀬戸口7号支石墓 c 下清水5号石棺 d 小倉城二ノ丸石棺墓IV-1
 e 中ノ浜3次E-2箱式石棺 f 庄・蔵本6次石棺墓1 (各文献より引用改変)

B 型式と被葬者の身体サイズ・埋葬姿勢・数の関係

さて、これまでの分析を通じて、薄壁式と厚壁式といった二つの大別型式、前者については三つの細別型式が設定されたが、これらを成立させた背景はどう考えられようか。死者と近い関係にあり、かつ実際に石棺製作に関わった人びとの脳裏にある理念型⁵⁾に関する問題である。石棺は遺体を収納し葬るための容器であるので、製作者がまず把握しなければならないことは、被葬者の身体サイズである。そして、知り得た身体サイズを念頭に置き、さらに社会の中で許容された埋葬姿勢や副葬品の配置などの一連の葬送行為をも見込んだうえ、丁度よい寸法で、最終的には棺を仕上げたはずである。そこで、遺存人骨から判明した被葬者に関する情報と型式の関係を検討することによって、以下、この問題にアプローチしたい。

図6-fは、長さや壁最大厚の関係に、被葬者の年齢・性別・数を示した散布図である。まず、厚壁式について検討する。この型式には、成人男性1体〔▲〕、成人男性?1体〔△〕、成人男性1体以上を含む複数(改葬)〔◆〕が含まれている。山口県中ノ浜遺跡9次調査ST903(長さ198cm)の被葬者は、人骨の保存状態が良くなかったものの、伸展葬であったと推定されている(豊浦町教委1985)。中ノ浜遺跡3次調査E-2箱式石棺(長さ148cm)では、4体の人骨が確認されているが、そのうちの1体は膝を曲げた屈肢葬であったことが実測図からうかがえる(図8-e)。

では、被葬者の数は、棺の長さに影響を与えていないであろうか。図6-fでは、単体と複数体との間で長さに大きな差がないばかりか、単体で複数体よりも長さが大きい例すらある。中ノ浜遺跡1次調査では、石棺内に遺存した人骨のあり方から、一度埋葬した遺体の骨の一部を一定期間後、取り出して別の場所に改葬し、さらに残された人骨を小口隅に寄せ集めて次の遺体を安置するといった葬送行為が推定されている(國分ほか1988)。このように、あらかじめ初葬者を一定期間後にどこかに改葬するつもりであったのであれば、次の埋葬に備えて棺のサイズを大きくつくる必要はない。複数体が埋葬された棺であっても、その長さは初葬者の身体サイズや埋葬姿勢によって、決定されたようである⁶⁾。

以上のことから、厚壁式は成人の遺体を屈肢葬あるいは伸展葬で埋葬し、時に複数回にわたって改葬することを念頭につくられた型式と考えられる。なお図6-fには、参考までに「銅剣・管玉副葬」墓〔■〕も表示した。これは銅剣1本と管玉83個が副葬されていた福岡県小倉城二ノ丸家老屋敷跡石棺墓IV-1である(図8-d)。内法の長さは262cmを測り、成人1体を伸展葬で安置したとしても、余りある長さである。この例は、棺の長さに被葬者の社会的地位の高さが表現された可能性がある。

つづいて、薄壁式はどうか。まず、薄壁I式には成人女性1体〔●〕が含まれる。これは長崎県出津遺跡1号石棺(長さ74cm)で、そこでは下肢を強く曲げた屈肢葬により被葬者が埋葬されていた(図7-b)。したがって、薄壁I式に該当する他の例についても、こうした埋葬姿勢で成人が葬られた可能性が出てくる。薄壁I式に該当する、縄文晩期後葉～末葉の小規模な石棺に、遺体をどう埋葬するのかについては、以前から次の二つの仮説が鋭く対立している。

すなわち、極端な屈葬で遺体を安置したとみる森貞次郎の説（森1969）と、他所で火葬した後、その骨を収納したとみる橋口達也の説（橋口1983）⁷⁾である。先述の出津遺跡例は森説を支持する。いっぽう、現状で橋口説を積極的に裏づける火葬骨などの証拠は得られていない。森説が有力ではなかろうか。

ところで、薄壁Ⅰ式には成人棺だけでなく、小児棺も含まれる可能性がある。本稿では、小児棺を資料から極力除外するように努めたが、この型式については、成人棺・小児棺の区別は容易ではない。次節で明らかにするように、縄文晩期後葉～末葉の長崎県域における石棺のほぼすべてが薄壁Ⅰ式に該当する。長崎県域では、墓の多くで薄壁Ⅰ式石棺が採用された遺跡もあるが、個々の墓域での棺の法量をみても、そこに有意な不連続は見出し難く、小児人骨が遺存した例もない。ともあれ、ここでは薄壁Ⅰ式を、成人・小児の遺体を屈葬（あるいは火葬などの二次葬？）で埋葬することを念頭においた型式と理解しておく。

薄壁Ⅱ式には成人男性1体〔▲〕が含まれる。これは佐賀県大友遺跡3次3号墓（長さ123cm）で、膝を曲げた屈肢葬が確認できる。薄壁Ⅲ式には、成人女性？1体〔○〕の例がある。これは長崎県宇久松原遺跡2004年度SK025（長さ141cm）で、人骨の遺存状態は悪く、埋葬姿勢は確認できないものの、土層観察により、埋葬後、蓋石を開閉した可能が指摘されている（図7-f）。同遺跡SK027（長さ104cm）では、成人男性を含む複数体の人骨が確認され、かつ土層観察をもふまえ、追葬・再葬の可能性が想定されている（鹿児島国際大2008）。

薄壁Ⅱ式が多くなり、薄壁Ⅲ式が出現する弥生前期以降になると、棺の長さの増大とともに、成人棺・小児棺の区別がはっきりしてくる。遺存人骨により小児棺であることが確実な例は、資料から除外したが、宇久松原遺跡1977年度1号石棺墓（長さ98cm）、3号石棺墓（長さ44cm）の2例がある（小田1970）。成人棺との差は明瞭である。

以上のことから、薄壁Ⅱ・Ⅲ式は、成人の遺体を屈肢葬で埋葬し、時に追葬・再葬することを念頭においた型式と理解しておく。

C 各地域・遺跡における型式の存続時間幅

ここでは、各型式の存続時間幅を地域・遺跡ごとに検討しよう。それを整理すると、表3の通りである。対馬では、中道壇遺跡で弥生前期前葉～後葉にかけての薄壁Ⅱ式が確認できる。壱岐では、小場遺跡で弥生前期後葉の薄壁Ⅱ式が確認できる。五島列島では、弥生前期中葉に薄壁Ⅲ式が出現することが笛吹遺跡で確認できる。宇久松原遺跡でも、弥生前期中葉～末葉に属する薄壁Ⅲ式が確認されており、五島列島で同型式はその後にも継続する。後述するように、薄壁Ⅰ・Ⅱ式は縄文晩期後葉～末葉に出現することから、薄壁Ⅲ式はこれらよりも後出することは間違いない。したがって、薄壁Ⅰ・Ⅱ式→薄壁Ⅲ式という型式変化が想定し得る。弥生前期後葉～末葉の薄壁式は、殿寺遺跡でも確認されている。長崎北部では、縄文晩期後葉～末葉にかけて薄壁Ⅰ式が出現することが、天久保遺跡、大野台遺跡、小川内支石墓群、狸山支石墓群で確認できる。薄壁Ⅰ式は弥生前期中葉まで継続することが、四反田遺跡で確認できる。こ

表3 各地域・遺跡における型式の存続時間幅

地域	遺跡	型式	数量	縄文晩期 後葉	縄文晩期 末葉	弥生前期 前葉	弥生前期 中葉	弥生前期 後葉	弥生前期 末葉	弥生中期 初頭
対馬	中道壇	薄壁Ⅱ	4			■■■■	■■■■	■■■■		
		薄壁	4			■■■■	■■■■	■■■■		
宍岐	小場	薄壁Ⅱ	1					■■■■		
五島列島	宇久松原	薄壁Ⅲ	2					■■■■	■■■■	
		薄壁	1					■■■■	■■■■	
	笛吹	薄壁Ⅲ	2				■■■■			
		薄壁	2				■■■■			
長崎北部	天久保	薄壁Ⅰ	4	■■■■	■■■■					
	大野台	薄壁Ⅰ	18	■■■■	■■■■					
		厚壁	1	■■■■	■■■■					
	小川内	薄壁Ⅰ	8	■■■■	■■■■					
		薄壁	2	■■■■	■■■■					
	四反田	薄壁Ⅰ	1				■■■■			
狸山	薄壁Ⅰ	3	■■■■	■■■■						
長崎南部	出津	薄壁Ⅰ	1	■■■■	■■■■					
	西鬼塚	薄壁Ⅰ	4	■■■■	■■■■					
		薄壁Ⅰ	15	■■■■	■■■■					
	原山	薄壁Ⅱ	1	■■■■	■■■■					
		薄壁	3	■■■■	■■■■					
	風観岳	薄壁Ⅰ	5	■■■■	■■■■					
薄壁		1	■■■■	■■■■						
唐津	大友	薄壁Ⅱ	1						■■■■	
	瀬戸口	厚壁	1	■■■■	■■■■					
響灘沿岸	梶栗浜	厚壁	3						■■■■	
	小倉城二ノ丸	厚壁	6						■■■■	■■■■
	中ノ浜	厚壁	9				■■■■	■■■■	■■■■	■■■■
周防灘沿岸	下清水	厚壁	3						■■■■	■■■■
	下稗田	厚壁	1			■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■
徳島	庄・蔵本	厚壁	2				■■■■	■■■■		

■■■■ 確実性高い

■■■■ 可能性に幅を見込む必要あり

の地域では、縄文晩期後葉～末の厚壁式が大野台遺跡で1例だけ認められるが、単発に終わり、後に続かない。長崎南部でも北部同様、縄文晩期後葉～末葉にかけて薄壁Ⅰ式が出現し、存在したことが、出津遺跡、西鬼塚遺跡、原山支石墓群、風観岳支石墓群で確認できる。ただ、この地域で弥生前期例は未確認である。薄壁Ⅱ式は1例だけ原山支石墓群で確認できる。唐津では、縄文晩期後葉～末の厚壁式が瀬戸口支石墓群で1例だけ認められるが、単発に終わる。その後、大友遺跡の薄壁Ⅱ式(弥生前期末葉?)が出現するまで、石棺自体の空白期間が続く。響灘沿岸では、弥生前期中葉に厚壁式が出現することが中ノ浜遺跡で確認でき、この遺跡では中期以降も継続する。厚壁式は梶栗浜遺跡では弥生前期末葉の例が、小倉城二ノ丸家老屋敷跡

では弥生前期末葉～中期初頭の例が確認できる。周防灘沿岸では、弥生前期に厚壁式が出現し、その後も長期間にわたって継続したことが下稗田遺跡で知られる。下清水遺跡でも、弥生前期末葉～中期前半に属する可能性が高い厚壁式がある。徳島の庄・蔵本遺跡では、弥生前期中葉～後葉に厚壁式が出現するが、その後は続かない。

IV 考察

A 二型式の祖型

さて、薄壁式、厚壁式それぞれの祖型は何に求めることができようか。筆者は支石墓の伝播と受容を論じる中で、石棺の祖型について論じたことがあるが(端野2001, 2018)、以下、本稿で改めて設定した二型式の祖型について議論する。

まず、薄壁式の祖型についてはどうか。前章での分析結果により、薄壁式のうち、最も古いI式は、薄壁1段(枚)、平面箱形を志向した型式であることが指摘できる。こうした特徴は、朝鮮半島南部の石棺・木棺の双方に認められる。石棺の例として、慶尚南道大坪里玉房2地区例(慶尚大博1999)、木棺の例として、慶尚南道虎灘洞遺跡例(東亜細亜文化財2012)をあげる(図9-a・c)。半島南部の組合せ式木棺の中に、平面形が箱形をなす例が存在し、その特徴が西北九州(長崎県域)の石棺でもみられることは以前、指摘したことがある(端野2017)。列島内でも材質転換を想定すれば祖型を求め得る。玄界灘沿岸では、福岡県新町遺跡(志摩町教委1987)、長野宮の前遺跡(前原町教委1989)で、平面箱形の木棺痕跡が検出されており(図9-d・e)、これが組合せ式であれば、祖型の候補になる。

厚壁式は、唐津と響灘沿岸以东とでは出現時期に違いがあり、それぞれについて別の祖型が想定し得る。唐津で縄文晩期後葉～末葉に出現する厚壁式の祖型は、半島南部の支石墓の積石墓室⁸⁾に求められる。例として、慶尚南道栗下里遺跡例(慶南発展2009)をあげる(図9-b)。いっぽう、響灘沿岸以东の例については、出現時期が弥生前期中葉であり、列島内でその祖型を求め得る。その候補として、福岡県田久松ヶ浦遺跡SK218(縄文晩期末葉)などがあげられる(図9-f)。内部に刳り抜き式木棺の存在が想定される積石墓室を備えた、この例には、厚壁式石棺を構成する属性と共通した特徴を認めることができる。壁の厚さ、内法の長さといった計測的属性での類似に加え、非計測的属性でいえば、平面形が箱形をなす点は平面形C類、2段以上の積石により壁を構築する点は構築法A類、数枚の板石を横掛けする点は蓋石A1類に類似する。これらの属性の類型は、厚壁式に多くみられるものである。

ところで、それぞれの型式の存続時間幅からみて、薄壁式が厚壁式の祖型となり、壁の厚さ、棺長を増大させ、前者から後者へと変化したとみる人もいるかもしれない。この考え方は、別の見方をすれば、長崎県域から響灘沿岸・周防灘沿岸へと石棺が伝播したということにもつながる。しかし、厚壁式には、薄壁式からの変化では説明のつかない特徴を有する例も含まれるので、この考え方は首肯できない。それは、壁を積石で構築する例である(図8-d)。こうした積石による壁は、祖型である積石墓室の特徴を受け継ぎ、それが痕跡化したものとみなせる。

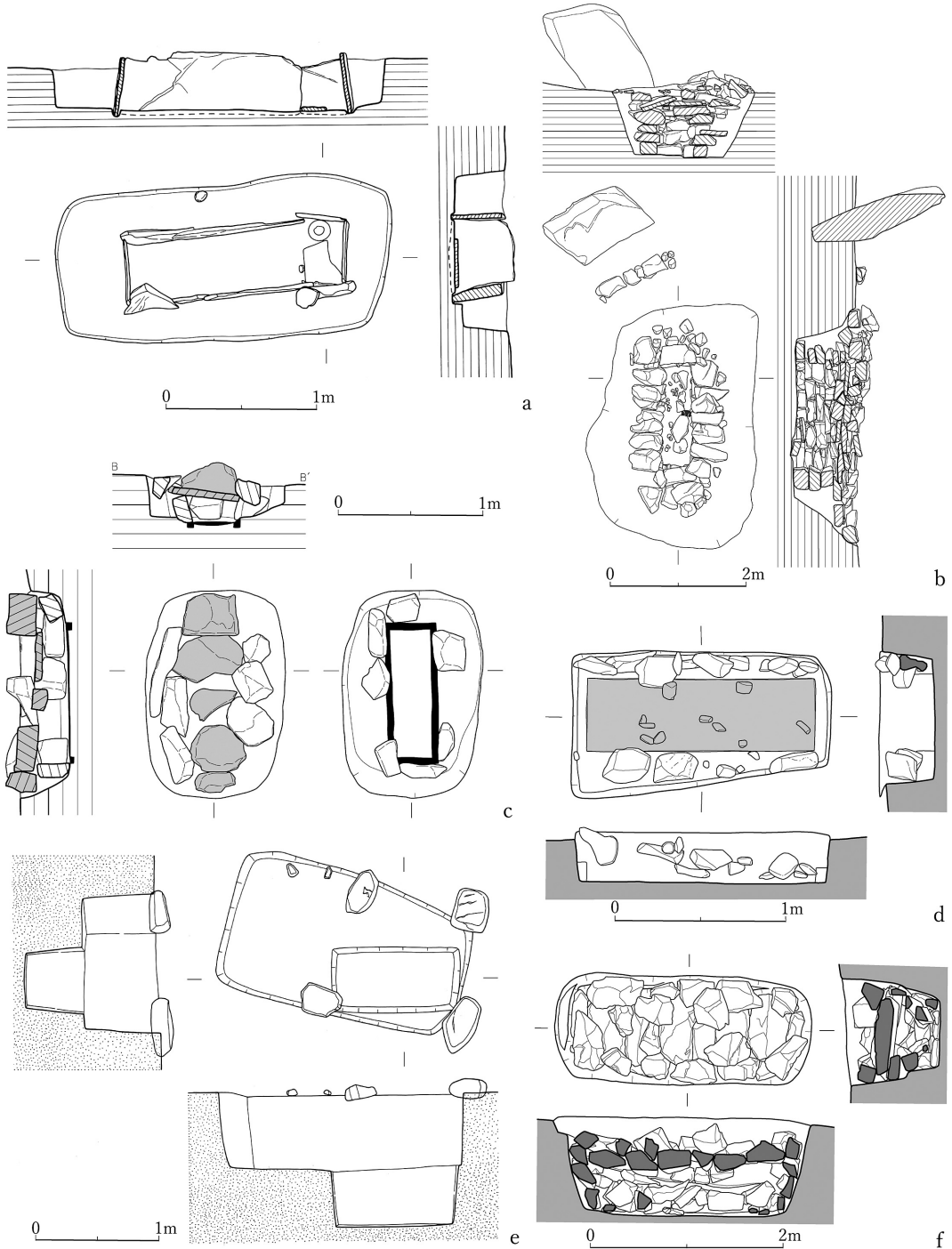


図9 初期箱式石棺の祖型候補

a 大坪里玉房2地区10号石棺墓 b 栗下里A1-1号墓 c 虎灘洞ナ地区10号墓 d 長野宮ノ前10号墓
e 新町42号墓 f 田久松ヶ浦 SK218 (各文献より引用改変)

B 石棺の受容をめぐる問題

つづいて、以上の祖型論をふまえて、各地域における石棺の系譜・受容をめぐる問題について議論しよう。ここでは、対馬・壱岐を除く長崎県域、対馬・壱岐、響灘沿岸以東の三つに分けてみていく。

まず、対馬・壱岐を除く長崎県域については、これまでも支石墓の受容に合わせて論じてきたが（端野2001, 2003, 2018）、再論する。この地域では縄文晩期後葉～末葉に薄壁式が主として出現する。先述のように、薄壁式の祖型の候補としては、半島南部の支石墓の組合せ式石棺・木棺、玄界灘沿岸の組合せ式木棺がある。いずれを直接的な祖型とみなすにせよ、積石墓室をもつ支石墓に関する情報が、この地域まで到達していたことは注意しておいた方が良からう。この地域では、棺材と墓壙の間に、礫を詰め込んだ例（原山第3支石墓群20号・40号・43号）がある（図7-c）。これらは、支石墓の積石墓室の痕跡器官とみなせる。また、板石と積石を組み合わせて棺を構築した例（小川内支石墓群4号・9号、大野台遺跡C地点8号）もある。大野台遺跡C地点8号は、この地域で唯一の厚壁式とみなせる例でもある（図8-a）。こうした事実は、長崎県域の支石墓も玄界灘沿岸のそれと同じく、積石墓室あるいはそれに類する下部構造をもつものが祖型となったことを示している。長崎県域では石棺、玄界灘沿岸では木棺（土壙）というように、両地域間の支石墓では、埋葬施設に顕著な地域差が認められる。こうした差異は、それぞれの地域社会に同様の情報が到達しつつも、異なる環境下で別物を志向した結果、顕在化したというのが実態ではなかろうか。

対馬・壱岐での石棺の受容はどうか。現状でこれについて論じるのは困難である。両地域における石棺自体の出現期は、泉遺跡例（岡崎1953）の問題⁹⁾も含め、不鮮明と言わざるを得ない。これが受容を論じる際の大きな障害となっている。そこで、分析対象となった対馬の中道壇遺跡例、壱岐の小場遺跡例について、周辺地域の例との親縁性を指摘するにとどめておきたい。中道壇遺跡例は、薄壁Ⅱ式と薄壁式、同Ⅲ式（板石積石棺墓）の可能性が指摘される1例（長崎県教委1988b, 田崎1989）からなる。小場遺跡例は、薄壁Ⅱ式に該当する¹⁰⁾。これらの型式は、分析対象とした地域のなかでは、五島列島・長崎北部・南部で確認でき、中道壇遺跡例、小場遺跡例とこうした地域例との間に親縁性を認めることができる。半島南部の中期無文土器文化では、薄壁Ⅲ式は未確認だが、先述のように、薄壁式の祖型とみることができる例や、薄壁Ⅱ式に該当する例も存在する。したがって、半島南部例との間にも、親縁性を見出すことができる。

響灘沿岸以東での石棺の受容は、板付Ⅰ式土器の広域拡散（田中1986ほか）と関係するものとみられる。板付Ⅰ式土器の製作伝統とともに、積石墓室に関する情報が、北部九州から列島西部の各地へと広がり、響灘沿岸の中ノ浜の墓地では、弥生前期中葉に厚壁式石棺というかたちで現出したと考えられる。ここで注意されるのは、積石墓室そのものが受容されたわけではなく、石棺に姿を変えて受容されたという点である。これは、外来墓制の受容の背後に、在来伝統や規制が存在したこと、仮に人の移動があったとしても、その量は少数であったことを示

しているのではなかろうか。徳島の庄・蔵本遺跡では、中ノ浜遺跡例とほぼ同時期の弥生前期中葉に厚壁式が出現する。響灘沿岸から厚壁式をそのまま受容した可能性もあるが、板付Ⅰ式土器の広域拡散とともに、北部九州から積石墓室に関する情報が直接伝達され、在地で改変を受けた結果、厚壁式石棺となった可能性もある。

おわりに

以上、初期箱式石棺を型式分類し、その時空間的様相を検討したうえで、各型式の祖型、受容の問題について議論した。まず、当該資料を分類学的方法によって、分析過程を明示しつつ型式設定を行った点に本稿の意義を置きたい。こうした試み自体は決して新しいものではないが、大切なことにもかかわらず、日本考古学界では現状でも主流となり得ていないのではないかと。そういう思いに駆られつつ、検討を進めた次第である。また、型式の祖型論を通じて、墓制の系譜論にも一定の貢献ができたのではないかと考える。しかし、筆者の怠慢のため、多くの課題を残すこととなった。今後、再論したい。

なお、北九州市市民文化スポーツ局の原田智也氏には、資料調査に際し、大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

岩永省三先生と最初に接したのは、2001年の初春、修論を書き終えたあと、故・田中良之先生に奈良県古墳踏査にお連れいただいたときだったように思う。その少し前まで奈文研におられた先生自ら、古墳の墳形等を細かく書き込み、使い込んだ地形図を片手に、軽快な足取りでご案内いただいたことを覚えている。先生が九大に赴任されてからは、あの「集中ゼミ」でのマルクス主義の時間は、より一層ディープになった。上級生になったとはいえ、浅い理解にとどまっていた私には内心、冷や汗ものであった。その後も立場を変え、長く九大に在籍した私は、きめ細かなご指導を賜り、先生の学問に対する厳格なご姿勢に触れることができた。そうしたご姿勢とは裏腹に時折ご披露される、岩永先生流のユーモラスなスピーチも印象に残っている。今後もご健康で、時に厳しく、時に楽しく私たち後進をお導きいただきたく思う。

これまでの学恩に報いるには、いささか拙い内容ではあるが、本稿を捧げて感謝のしるしをしたい。

■註

- 1) 本稿では縄文晩期後葉～弥生前期末葉の箱式石棺について、このように呼ぶ。
- 2) この背景には、各研究者が対象とした資料の時空間的範囲が強く影響しているように思われる。また、提示した各類型が「型式」であることを表明しているのは、2000年代以降の研究からであることは注意しておく必要がある。
- 3) 佐賀県大友遺跡の支石墓の墓壇側面、床面にみられる配石を「割石積石棺」あるいは「石櫛状石棺」と呼び、これを石棺の一種とみなす研究者もいる(中村大2007、宮本2012)。しかし、これらは本稿での石棺の定義を満たさないため、資料には入れなかった。また、壁の一部に土器を用いた例、小口壁を省略し

た例も同様に含めなかった。

- 4) 対馬では、縄文晩期の石棺として、泉遺跡の例が古くから知られるが(岡崎1953)、所属時期に不確かさがあり、本稿では資料に含めていない。ただ、棺内の中央部から出土した大型(長さ2.6cm)の碧玉製管玉からみるとどうか。九州北部弥生時代の碧玉製管玉のサイズ・規格性を検討した渡邊隆行は、大型品が突帯文期～弥生前期中頭に出現し、その後、姿を消すものの、弥生中期後半になると再び出現する過程を示した(渡邊1997)。これにもとづけば、泉遺跡例の所属時期は弥生中期後半である可能性が示唆されるとともに、縄文晩期後葉までさかのぼる可能性も依然として残る。長崎県化屋大島遺跡例は、「弥生前期末～中期中頭」に属すると報告されているが(多良見町教委1974)、中期前葉(須玖I式期)まで下ると考えられるので(端野2015, 2018)、除外した。長崎県宮の本遺跡の「弥生墓地北側」石棺墓群の所属時期は「弥生前期末」とされるが(佐世保市教委1980)、棺の法量と伸展葬からみて、弥生後期まで下る可能性があるものと考え、これも除外した。壱岐の大久保遺跡では、弥生前期末葉～中期中頭までさかのぼる可能性がある例が確認されている(長崎県教委1988a)。しかし、所属時期を確定し得ないので、資料に含めていない。
- 5) 「描かれざる設計図」(小林行1933)、「mental template」(Deetz 1967)、「範型」(小林達1977)というように呼ばれているものに該当する。
- 6) これは、初葬時にあらかじめ追葬を見越したうえで、棺の長さを決めたとみられる弥生中期以降の状況とは大きく異なる。中ノ浜遺跡9次調査ST906(弥生中期中葉～後半)では、長さ298cmの石棺に、熟年～老年男性1体、成年女性1体、成年男性2体、幼児3体、乳児1体の計8体が(豊浦町教委1985)、山口県土井ヶ浜遺跡2次調査2号箱式石棺墓(弥生中期?)では、長さ292cmの石棺に、熟年男性4体、熟年女性1体、不明男性1体の計6体が埋葬されていた(土井ヶ浜遺跡2014)。
- 7) 長崎県風観岳支石墓群の発掘調査を報告した秀島貞康は、地山土に由来する石棺内埋土を、火葬などにより遺体を処理する二次葬の証拠と解釈して、この見解を支持した(秀島2006)。
- 8) 以前、筆者はこれに相当する構造物を「石槨」と呼んでいた(端野2001, 2003, 2018)。しかし、2001, 2003年論文発表当時はこうした構造物の内部に、組合せ式木棺と呼べるような痕跡が確認されていなかった。このため、これを内部に木棺が存在しない「割石積石棺」あるいは「石槨状石棺」とみなし、列島への伝播論(中村大2007, 宮本2012)が展開されたこともある。ところが、本文中で述べたように、その後、内部で木棺の痕跡が確認されたことによって、筆者の想定の正しさが証明された。ただ、「石槨」という用語は、内部に木棺が存在することを前提としたものであるため、本来、木棺の存在を裏づける証拠がない場合、使うのは好ましくない。そのため今後、こうした構造物については、内部に木棺があろうがなかろうが関係なく、その差異を許容し、ありのままを表現する「積石墓室」を用いたい。
- 9) 註4参照。泉遺跡例は、棺内法の長さが200cm程度あり、長崎地域の縄文晩期例と比べると、違和感を感じざるを得ない。しかし、これが対馬での石棺受容の実態である可能性もあり、やはり縄文晩期までさかのぼる可能性を排除できない。
- 10) 資料から除外したとはいえ、大久保遺跡例(長崎県教委1988a)も、規模・構造・埋葬姿勢(屈肢葬)は薄壁Ⅱ式の範疇に収まるとみてよい。なお、壱岐の箱式石棺を集成した論考として、白石(2014)がある。

■文献

- 有馬町教育委員会, 1997. 西鬼塚支石墓・石棺群.
 Deetz, J., 1967. Invitation to Archaeology. Doubleday, New York.
 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム, 2014. 土井ヶ浜遺跡第1次～第12次発掘調査報告書.
 東亜細亜文化財研究院, 2012. 晋州 虎灘洞 先史遺跡.

- 藤田等, 1987. 石棺墓. 弥生文化の研究8 (金関恕・佐原真 編), pp.98-104. 雄山閣, 東京.
- 慶南発展研究院歴史文化センター, 2009. 金海 粟下里遺跡II.
- 慶尚大学校博物館, 1999. 晋州 大坪里 玉房2地区 先史遺跡.
- 橋口達也, 1983. 夜白期の遺構. 石崎曲り田遺跡I (福岡県教育委員会 編), pp.39-55. 福岡県教育委員会, 福岡.
- 端野晋平, 2001. 支石墓の系譜と伝播様態. 弥生時代における九州・韓半島交流史の研究 (田中良之 編), pp.29-62. 九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座, 福岡.
- 端野晋平, 2003. 支石墓伝播のプロセス—韓半島南端部・九州北部を中心として—. 日本考古学 16, 1-25.
- 端野晋平, 2015. 近年の弥生時代開始期墓制論の検討. 古文化談叢 74, 95-129.
- 端野晋平, 2016. 板付I式成立前後の壺形土器—分類と編年の検討—. 考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集 (田中良之先生追悼論文集編集委員会 編), pp.325-349. 中国書店, 福岡.
- 端野晋平, 2017. 中村大介著「支石墓の多様性と交流」に対するコメント. 長崎県埋蔵文化財センター研究紀要 7, 59-71.
- 端野晋平, 2018. 初期稲作文化と渡来人. すいれん舎, 東京.
- 秀島貞康, 2006. 支石墓について. 風観岳支石墓発掘調査報告書 (諫早市教育委員会 編), pp.182-187. 諫早市教育委員会, 諫早.
- 久村貞夫, 1980. 埋葬遺構. 宮の本遺跡 (佐世保市教育委員会 編), pp.42-71. 佐世保市教育委員会, 佐世保.
- 井上和夫, 1974. 肥前西部の石棺墓について. 化屋大島遺跡 (多良見町教育委員会 編), pp.19-25. 多良見町教育委員会, 多良見.
- 諫早市教育委員会, 2006. 風観岳支石墓群発掘調査報告書.
- 伊東照雄, 1981. 弥生土器の種類と時期区分. 綾羅木郷遺跡 (下関市教育委員会 編), pp.344-368. 下関郷土の文化財を守る会, 下関.
- 岩永省三, 1980. 弥生時代青銅器型式分類編年再考. 九州考古学 55, 1-22.
- 鏡山猛, 1941. 原始箱式石棺の姿相 (一). 史淵 25, 131-165.
- 鏡山猛, 1942. 原始箱式棺の姿相 (二・完). 史淵 27, 43-84.
- 鹿児島国際大学考古学ミュージアム, 2008. 長崎県宇久松原遺跡 鹿児島県高橋遺跡.
- 金関恕, 1965. 梶栗浜遺跡. 下関市史原始—中世 (下関市市史編修委員会 編), pp.138-149. 下関市役所, 下関.
- 金関恕, 2000. 梶栗浜遺跡. 山口県史 資料編考古1 (山口県 編), pp.324-327. 山口県, 山口.
- 北有馬町教育委員会, 1981. 国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書.
- 北九州市教育委員会, 2012. 小倉城二ノ丸家老屋敷跡2.
- 小林達雄, 1977. 縄文土器の世界. 日本原始美術大系1 縄文土器 (小林達雄 編), pp.154-181. 講談社, 東京.
- 小林行雄, 1933. 先史考古学に於ける様式問題. 考古学 4 (8), 223-238.
- 國分直一・伊東照雄・木下尚子, 1988. 中ノ浜遺跡の弥生時代前期埋葬. 地域文化研究3, 3-46.
- 桑山龍進, 1964. 五島一般調査報告. 五島遺跡調査報告 (長崎県教育委員会 編), pp.1-19. 長崎県教育委員会, 長崎.
- 九州大学文学部考古学研究室, 1997. 長崎県・天久保支石墓の調査. 東アジアにおける支石墓の総合的研究 (九州大学文学部考古学研究室 編), pp.151-194. 九州大学文学部考古学研究室, 福岡.
- 九州大学医学部解剖学第二講座, 1988. 日本民族・文化の生成2 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成. 六興出版, 東京.

- 前原町教育委員会, 1989. 長野川流域の遺跡群 I. 埋蔵文化財研究会, 2000. 弥生の墓制 (1).
- 宮本一夫, 2009. 小場箱式石棺の調査. 壱岐カラカミ遺跡II (宮本一夫 編), pp.107-112. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室, 福岡.
- 宮本一夫, 2012. 弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係. 古文化談叢 67, 147-176.
- 森貞次郎, 1969. 日本における初期の支石墓. 金載元博士回甲記念論叢 (金載元博士回甲紀年論叢編輯委員会 編), pp.974-992. 乙西文化社, ソウル.
- 長崎県教育委員会, 1988a. 長崎県埋蔵文化財調査集報X I.
- 長崎県教育委員会, 1988b. 中道壇遺跡.
- 中村大介, 2007. 日本列島 弥生時代 開始前後の 墓制. 아시아의 巨石文化와 支石墓 (東北亜支石墓研究所 編), pp.123-148. 東北亜支石墓研究所, 和順.
- 中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 突帯文と遠賀川 (田崎博之 編), pp.471-498. 土器持寄会論文集刊行会, 松山.
- 中村豊, 2002. 縄文から弥生へー眉山北麓遺跡群の分析からー. 論集徳島の考古学 (徳島考古学論集刊行会 編), pp.245-258. 徳島考古学論集刊行会, 徳島.
- 大庭孝夫, 2003. 北部九州における石棺墓の導入と展開. 続文化財学論集 (文化財学論集刊行会 編), pp.639-648. 文化財学論集刊行会, 奈良.
- 小田富士雄, 1970. 弥生墳墓と習俗. 五島列島の弥生文化 (長崎大学医学部解剖学第二教室 編), pp.15-46. 長崎大学医学部解剖学第二教室, 長崎.
- 小田富士雄, 1975. 大野台遺跡. 古文化談叢1, 2-23.
- 小田富士雄, 1984. 総括. 神ノ崎遺跡 (小値賀町教育委員会 編), pp.117-121. 小値賀町教育委員会, 小値賀.
- 小値賀町教育委員会, 1997. 笛吹遺跡.
- 岡崎敬, 1953. 対馬の先史遺蹟 (一). 対馬 (水野清一 編), pp.9-34. 東亜考古学会, 京都.
- 定村責二・小田富士雄, 1965. 福岡県長井遺跡の弥生式土器. 九州考古学25・26, 6-10.
- 坂田邦洋, 1978. 長崎県・小川内支石墓発掘調査報告. 古文化談叢5, 155-173.
- 佐世保市教育委員会, 1980. 宮の本遺跡.
- 佐世保市教育委員会, 1994. 四反田遺跡発掘調査報告書.
- 鹿町町教育委員会, 1983. 大野台遺跡.
- 志摩町教育委員会, 1987. 新町遺跡.
- 下稗田遺跡調査指導委員会, 1985. 下稗田遺跡.
- 潮見浩, 1984. 中ノ浜遺跡の調査. 史跡中ノ浜遺跡保存管理計画策定報告書 (豊浦町教育委員会 編), pp.13-18. 豊浦町教育委員会, 豊浦.
- 白石溪冴, 2014. 壱岐島内の箱式石棺墓. 長崎県埋蔵文化財センター研究紀要4, 47-56.
- 外海町教育委員会, 1982. 出津遺跡.
- 外海町教育委員会, 1983. 出津遺跡.
- 正林護, 1980. 殿寺遺跡. 長崎県埋蔵文化財調査集報III (長崎県教育委員会 編), pp.1-46. 長崎県教育委員会, 長崎.
- 正林護, 1983. まとめ. 大野台遺跡 (鹿町町教育委員会 編), pp.133-143. 鹿町町教育委員会, 鹿町.
- 田畑直彦, 2000. 西日本における初期遠賀川式土器の展開. 突帯文と遠賀川 (土器持寄会論文集刊行会 編), pp.913-956. 土器持寄会論文集刊行会, 松山.

- 高木貞夫, 1978. 動物の分類. 東京大学出版会, 東京.
- 高野晋司, 1981. まとめ. 国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書(北有馬町教育委員会 編), pp.91-96. 北有馬町教育委員会, 北有馬.
- 田中良之, 1982. 磨消縄文土器伝播のプロセス. 古文化論集: 森貞次郎博士古稀記念(森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 編), pp.59-96. 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会, 福岡.
- 田中良之, 1986. 縄文土器と弥生土器1. 西日本. 弥生文化の研究3(金関恕・佐原眞 編), pp.115-125. 雄山閣出版, 東京.
- 谷直子, 2003. 北部九州弥生時代前期の墓制について. 先史学・考古学論究IV(龍田考古会 編), pp.491-514. 龍田考古学会, 熊本.
- 田崎博之, 1989. 石棺墓. 考古学ジャーナル 312, 7-12.
- 多良見町教育委員会, 1974. 化屋大島遺跡.
- 寺田正剛, 2005. 長崎県地域における箱式石棺墓の様相について. 西海考古6, 113-154.
- 徳島大学埋蔵文化財調査室, 1998. 庄・蔵本遺跡1.
- 徳島大学埋蔵文化財調査室, 2018. 庄・蔵本遺跡3.
- 豊浦町教育委員会, 1985. 中ノ浜遺跡第9次発掘調査概報.
- 築城町教育委員会, 1984. 安永遺跡.
- 若松町教育委員会, 1980. 若松町誌.
- 渡辺正気, 1982. 瀬戸口支石墓. 末廬国(唐津湾周辺遺跡調査委員会 編), pp.225-228. 六興出版, 東京.
- 渡邊隆行, 1997. 天久保遺跡の管玉についての一考察. 東アジアにおける支石墓の総合的研究(九州大学文学部考古学研究室 編), pp.179-185. 九州大学文学部考古学研究室, 福岡.
- 呼子町教育委員会, 1981. 大友遺跡.
- 行橋市教育委員会, 2019. 長井遺跡現地説明会資料.